

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 280 号

2025 年 8 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28

山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源「ピリピ書・コロサイ書講解説教」より (2)

「そしてあなた方のうちに良いわざを始められた方が、キリスト・イエスの日までにそれを完成させてくださるにちがいないと、確信している。」(6 節)

これも感謝していると書いてありませんけれども、これはパウロの感謝の内容と見てよろしい。パウロは確信している。これは未来、過去、現在のピリピの状態に対して感謝していると共に、ピリピの方々の未来に対してパウロは確信をもっている。どういう確信かというと、「あなた方のうちに良いわざを始められた方が、キリスト再臨の日までにそれを完成させてくださるに違いない」。ピリピの信者に向かって、「あな

た方の信仰は、キリストが再臨し給う時に必ず完成して下さる」と言う。あなた方は確かにキリストの前に立って、贖いの信仰によって復活するものとなるのであるということ。私は神において、神の力によって確信しているという。これによってピリピ人の望みを確立させた。

11 節「イエス・キリストによる義のみに満たされて神の
栄光と誉を表すに至るように」

「義のみ」というのは、信仰・望みからくる愛の行いです。
我々の行ないが愛に満たされて、そして復活の時、キリスト
来給う時には、復活して、それが「神の栄光とほまれをあら
わすに至るように、」今やパウロの祈りは神への栄光へと終
った。われわれの小さい人生と言えども、神へ栄光を期し、
神のほまれとなることができる。そういう人生をパウロは
我々に祈ってくれている。

内村鑑三は、「天国へ行ったとき、地上にあった間にもう
少しく善行をしておいたらよかった、もう少しく愛の行ない
をしておいたら良かったということが、天国において最も悲
しいこととなるであろう」ということをいった。われわれも
聖霊にはげまされて、分相応にこの世における人生をより愛
に満ちたものにする必要がある。

特に本日の挨拶の中心は、6 節「あなた方のうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成してくださるに違いないと確信している」。これがわれわれの人生の中心となるときに、我々に己に勝つ力が出てくる。天国は言葉ではない、力だ、とパウロは言った（コリント前書 4 章 20 節）

2 回出てきているこの「キリスト・イエスの日」。私は、10 年目にこれが聖書の predominant theme ということを行った。10 年前に、私は predominant という英語の言葉が非常に好きになりまして、昨日テープで聞いたその時の説教で、とくにこの predominant theme ということをおっしゃいます。しかし、10 年前には、これが本当に聖書の predominant theme、最も大事な問題であると口では言っているけれども、現在の理解と 10 年前の理解とはだいぶ違います。本当にこれが聖書の最も重要な問題であるということ、10 年目には、私が今感じているようにはわからなかった。

聖書のお恵みによって、この「キリスト・イエスの日」、

われわれの永遠無限の栄光の日を、われらは待ち望むものとしていただきたい。その時に初めて、我々に平安が望み、力が臨む、キリスト教のご利益はここにある。

我らは真理が見えない間は、いくら聖書を読んでも真理が移って来ない。そして、移ってきても、ぼんやりしている。それがだんだんはっきりとしてくる。われわれに聖霊が臨むにしたがって、そのぼんやりしていた真理がはっきりしてくる。これを「信仰の進歩」という。

9 節「私はこう祈る。あなた方の愛が」「愛」と言ったら信・防・愛と三つ一緒ですから「あなた方の信仰が」と言ってもよろしい。

「あなた方の信仰が、深い知識において、鋭い感覚によって、いよいよ増し加わり、それによって、あなたがたが何が重要であるかを判別することができ、キリストの日に備えて、復活の日に備えて、純真で攻められることがないように祈る」と言う。我々の信仰が進んで来る。理解がはっきりしてくる。そういう必要がある。

信仰が進むにつれて、われわれには生きる力が出てくる。「天国は言葉ではない、力だ」とパウロは言った。(コリント前書 4 章 20 節)
あなた方の力を見せてもらいましょう、とパウロは言った。われわれは信仰がボヤっとしている間は、力になってこない。ご利益はない。ご利益のないような信仰はやめたほうがよろしい。

キリスト・イエスの日までに、完成させてくださる

その次の出てくるのは、「あなた方のうちに良いわざを始められた方が、キリスト・イエスの日までにそれを完成させてくださるに違いないと確信している。」パウロは「終わりの日、キリスト来給うときに必ずあなた方の信仰を完成して下さって、あなた方は復活するんだぞと言うことを私は確信している」といっている。このパウロの確信は、あなた方に、復活の望みを堅く持てということをお勧めしている。これがパウロの福音の中心です。パウロの福音と言うのは、イエス・キリストの福音の中心です。中心は我々が復活することです。この中心がロマ書においては、8章に表れている。

われわれには力がない。喜びがないと言うのは、この復活の望みが我々の信仰の中心になっていないからです。これがわれわれの信仰の中心になってくるときにわれわれに力がでてきて、よろこびがでてくる。

それから最後のパウロの祈りは、「あなた方がこの信仰と望みによっていよいよ善行が増し加わって」、これは愛の教えです。すなわち、愛の行いが実行できて、そして「終わりの日、イエス・キリスト来給う日に完成される。その完成を待ち望め：」という愛の教えです。

実にこの序文こそは、ピリピ書の要約であるのみならず、ロマ書の要約、パウロの全書簡の要約、否、キリスト教の要約です。信・望・愛。

そしてパウロは、「信・望・愛のうち最も大いなるものは愛なり」と言った。(コリント前書 13 章 13 節)。信・望・愛は、父・子・聖霊みたいなものです。三位一体です。一つの永遠の生命の表れですから、信・望・愛の三つは単数です。パウロは最も大いなるものは愛なり」と言った。

そうですから、愛というもの、すなわち神の意志をなすことは、われわれで言えば、日常、我々の目の前にある義務をなすことです。自分のなしたいことをなすのではなくして、なすべきことをなす。これを愛と言う。信・望・愛のうちでこれが最も大きいとパウロはいった。この愛に人類の幸福はかかっている。そしてこれは、我々に可能です。毎日可能。あまり愛ばかり偉大偉大と言って、信・望を忘れてはいけない。「最も必要なるものは信なり。もっとも力あるものは望みなり、最も偉大なるものは愛なり」、そう注釈してよろしい。そう注釈する方がパウロ自身にかなっている。

患難の意義

10年前に3つの感想を述べた。

患難の意義、パウロは牢屋へ入れられるという患難に会い、また・競争する伝道者のような、邪魔者に会い、またその他数多くの苦しみ、困難にあったことが、信者にも、未信者にもプラスになって働いた。パウロ自身にもプラスになって働いたという。これが信者に対する患難の意義であります。

パウロは淡々とこの患難を報告して、泣き言一つ言っていない。牢屋の仲は嫌なことが多いとか、競争者が出てきて邪魔しているとか、いやなことばかりでしょう。それがちっとも嫌と言っていない。却って喜ぶといっている。ことほどさように、患難というものがパウロの信仰を邪魔せずして、パウロの信仰を助けている。われわれも人生において小さな患難に会うことは、信仰の邪魔にならない。本当に患難に耐えて福音を聞いていたならば、それがプラスとなって我々に働く。これが信者の患難の意義です。

私は病気も患難のうちに入れていいと思います。病気と言うものはただ金銭的な損失だけでなくして、精神的に病人のみならず病人の近臣がいかに患難を感ずるか。病気は非常に患難のように思いま

すが、新渡戸稲造先生は、病気は金銭的にも非常にマイナスだけれども、マイナスばかりじゃない、非常にプラスの面があるということをおおせになりました。内村鑑三先生もなくなる前に、「自分に患難、苦しみが無かったならば、自分はキリストの救いも知らず、天国も知らず、普通の俗人として終わっていたであろう。しかし、自分に患難が臨んだために、福音を理解し、天国を望むものとなった。自分の信仰はひとえに患難のおかげである」ということをおっしゃった。ですから、われわれも患難にへこたれずに、患難を通して深く信仰を学びたいと思います。

新約聖書の最後、ヨハネの黙示録、「主よ、来たりたまえ」で新約聖書は終わっている。我々が復活するということが、新約聖書の conclusion 結論です。これを知らずしてキリスト教はない。

われわれは喜びの秘訣を知らない。顔を見たらわかる。我々の顔は大体喜びのない顔です。顔が証明する。どんなに深い信仰を持っていると自慢しても、私は信仰がないということを顔が証明しますよ。

そういうことを 10 年前に話しましたが、10 年たちましていよいよ、聖書の中心は復活である、永遠のお命が我々に臨むのだ、と言う確信が強くなりました。

復活説の説教に石館守三兄弟は、ロマ書 8 章 18 節「今のこの時の苦しみは、やがて私たちに現わされようとする栄光と比べるというに足りない」をお引きになりました。「これだ」ということを石館守三兄弟はお話になりましたが、まさしくこのロマ書 8 章 18 節が、我々の生活の中心となる時に、われわれには喜びがついてくる。